

未来の使命肩にぞ担ふ



校長
佐藤 隆史

ラグビー後援会の皆様には日頃より本校及びラグビー部に対し、多大なるご支援ご協力を賜り、誠にありがとうございます。この四月、工業高校として全国屈指の歴史と伝統を誇る本校の校長を拝命いたしました。以前、一〇年間教諭としてお世話になり、恩返しができる機会を与えてもらったことに、喜びと重い責任を感じております。

さて、ラグビーを校技とする本校には以前、職員ラグビー（職ラグ）チームがあり、他校職員との交流試合や一年生部員とのエキシビジョンマッチが組まれていました。三〇年以上も前になりますが、私自身も職ラグのユニフォームを着て、泥だらけになりながら一年生チームと試合をした思い出が残っています。フォワードをやらせていただき、心臓が飛び出そうになるくらいハードな動きと、ノーサイドの瞬間のあの充実感と爽やかさに魅了され、転勤後も秋工ラグビーへの応援は継続して参りました。

今年度、淡路直明部長、伊東真吾監督、阿部歩輝先生（理科）、佐藤一志先生（電気科）四人の新体制でスタートいたしました。中央支部総体決勝で

は、後半追い上げられ1トライ差で逃げ切ることができましたが、選手、指導陣ともに不本意な試合内容を反省しておりました。試合直後企画されていた藤島 大氏（スポーツライター）のご講演の中で、決勝戦での課題等を具体的にご指摘いただきました。胸に迫るお話であり、伝統の力を目覚めさせていただいたものと思います。全県総体では同じ相手に完勝することができませんでした。

その後の東北高校選手権も制しましたが、七月に来秋した、先の花園準優勝の國學院栃木戦では完敗し、全国トップレベルとの力の差をまざまざと見せつけられました。レベルの高い相手と切磋琢磨する機会を奪われたコロナ禍の影響は地方ほど顕著です。肌で感じることは最高の体験であり、体験なくして成長はありません。この完敗を糧にして、成長に繋げていくものと確信します。

秋工ラグビーの基本は「スクラムとタックル」、「当たり勝つことと、接点の強いラグビー」と伝え聞いております。全国優勝回数最多の十五回、準優勝六回という輝かしい伝統はこれらの基本を土台に、築かれ守られてきたのだと思います。職ラグでスクラムを経験しましたが、肩にかかるプレッシャーは相当なものでした。諸先輩たちは物理的なプレッシャーと伝統をその肩で担ってきました。

「進みて止まぬ科学の力、我が身に体し工業界の、未来の使命肩にぞ担ふ」

（校歌三番）を胸に刻み、本校同窓生の方々は、工業界の発展に大きな功績を残されてきました。少し大袈裟かもしれませんが、ラグビー部の伝統を担ってきた肩は、秋田工業高校の使命を担い、日本の工業界、日本の発展を担ってきたと言えるのではないのでしょうか。そして、ラグビー関係者でなくとも広く知られている紫白のユニフォームには、重き使命を担ってきた威厳があり、再び頂点に立つ姿を待ち望んでいる声は数知れず、花園でこそ映えるユニフォームであります。

前出の藤島氏からは「年を越した後の花園で通用するプレーかどうかを、普段の練習で問いかけてほしい」というご教示がありました。秋工ラグビー部の伝統に対する敬意が含まれていたものと感じております。

選手の皆さん。普段の練習では伝統の重みやプレッシャーを強く感じながらハードワークに徹し、本番の試合では伝統のユニフォームを着られる幸せを感じながら、思う存分躍動してください。

『ラグビーの花はタックル巨軀倒す』

乗津松彩子

